

# 私立 愛知工科大学

取組名称 **学士力と就職力を伸ばす就職支援アセスメントを活用した学生支援**

取組担当者 **キャリア支援課長 井戸田 敦**

## 1. 本学の概要

本学は、2000(平成12)年に風光明媚・気候温暖の蒲郡市に開学して10年を経過している。その基礎は1987(昭和62)年の愛知技術短期大学自動車工業学科・電子工学科の開学にはじまり、その伝統を本学併設の自動車短期大学とともに今に引き継がれている。「社会から喜ばれる知識と技術を持ち、歓迎される人柄を兼ね備えた人材を育成し英知と勤勉な国民性を高め科学技術、文化の発展に貢献する」ことを建学の精神とし、本学の教育指針を「心を磨き、技を極め、夢に挑む。」と定め、教育・研究・社会貢献の諸活動を行っている。

現在の学科構成は、機械システム工学科、ロボットシステム工学科、情報メディア学科の3学科で、2011(平成23)年度からはロボットシステム工学科を電子制御・ロボット工学科と改称する予定。また、同時にほかの2学科とともに教育カリキュラムを見直し、より新しい時代の要請にこたえることができる技術養成教育の実現を目指している。

また、自動車短期大学を修了し2級自動車整備士資格を取得後、本学工学部の機械システム工学科の1級自動車整備士課程へ編入学することにより1級整備士の資格試験が受験できる。

さらに、2008(平成20)年には大学院工学研究科システム工学専攻博士前期(修士)課程、博士後期課程が同時に発足し、2010(平成22)年3月にはじめての修了生に修士(工学)号を授与した。現在、大学院及び工学部合わせて632名の学生が学んでいる。

そのほか、「高度交通システム(ITS)研究所」や「宇宙システム研究所(ARC)」の開設をはじめ、新営の講義棟やホール棟も完成し、不断の教育改革に努めるとともに、学外の方々との連携・協力・相談等にも備え、様々な研究や交流を行っている。

## 2. 本取組の概要

本学では2011(平成23)年度より低学年からのキャ

リア教育の導入と必修単位化を目指している。指導ツールとして、1・2年生全員に進路支援アセスメントを提供し、ガイダンスとの連動で効果を高め、学士力や就職力の向上を図る。1年生では、自分の性格や強みを客観的に把握し、目標と行動計画を設定するきっかけづくりを目指す。2年生では、大学生活を振り返り、自己の成長の確認とともに、目標の再設定と行動計画の見直しに努める。これらの結果を踏まえ、担任とキャリアセンターとの連携で、学生一人ひとりの特徴や課題の発見が可能となる。さらに、就職支援には保護者との連携も重要である。充実した大学生活を過ごし、就職活動に備えるための保護者向け支援教材も配付し教育懇談会を通じて進路支援への理解と協力をお願いする。

## 3. 本取組の趣旨・目的・達成目標

### (1) 全体

厳しい雇用情勢を迎え、就職率の向上を図るには、入学直後からの自己分析によって大学生活に目標を持たせることが重要である。その分析資料の材料となる就職支援アセスメントの活用とキャリアガイダンスを連動(実施)させることで、学生一人ひとりの課題の確認や目標設定が容易になり、充実した大学生活の実現とともに就職力の向上に資することを目的とする。

### (2) 本年度

本年度の目的は、現1・2年に対し、「START」「自己発見レポート」「自己プログレスレポート」の就職支援アセスメントとテキスト「マイキャリアノートⅠ」「マイキャリアノートⅡ」を使用する。現2年生の保護者には、就職マガジン「Uni Career保護者編」を配付し、3年生の後期からはじまる就職活動の準備に備えた心構えと協力を依頼する。

なお、本年度の取組を通じて2011(平成23)年度からの低学年からのキャリア教育の必修単位化に向けた移行期間としてその成果を検証する。

## 4. 本取組の具体的内容・実施体制

アセスメントの実施にあたり、第2の就職氷河期と言われる現在の就職環境を報告し、それに対する大学のキャリア支援の取組と趣旨について説明した。

アセスメントや学力テストの結果を含め、ただ確認して終わるのではなく、いかに自分自身で考え、さらに行動に起こすことができるのかが重要であることを強調した。

### (1) アセスメント「自己発見レポート」

工学部1年生を対象に、自分の性格や強みを理解し充実した学生時代を送ることを目的に、性格・興味・能力等の客観的な測定と結果報告を基にガイダンスを実施した。

### (2) アセスメント「自己プログレスレポート」

工学部2年生を対象に、今までの学生生活で取り組んできたことを振り返りながら、今後の学生生活や将来の進路を考えることを目的に、得られた結果報告を基にガイダンスを実施した。



写真 ガイダンスの実施

### (3) 一般常識・基礎学力テスト「START」

工学部2年生を対象に、一般常識（社会科学・人文科学・自然科学・時事）と基礎学力（英語運用・日本語理解・判断数理）問題を出題した。

### (4) 就職マガジン「Uni Career保護者編」

工学部2年生の保護者を対象に、就職活動に関する知識と理解を深め、家庭における学生支援を目的に就職マガジンを配付（郵送）した。

## 5. 本取組の評価体制・評価方法

アセスメント「自己発見レポート」の調査結果を基

に、1年に対しガイダンスを行うことで、今後の大学生活の目的や将来について考え、目標と行動計画の策定によって、実行するきっかけを与えることができた。受講アンケートでは、現在の学生生活が充実していると答えた学生は出席者の38%と低い一方で、本取組で行ったことが役に立つと答えた学生は81%と高くこれからの活動に期待のもてる結果となった。

アセスメント「自己プログレスレポート」の調査結果を基に、中だるみのしやすい2年に対し、1年の振り返りと今後の進路を考えることで、「目標」を見直し新たな気持ちで大学生活を取り組むきっかけを与えることができた。受講アンケートでは、将来の進路に不安を抱える学生が出席者の91%を占め、自分に何が足りなく、何が必要で、何を伸ばしていけば良いかを掴むことができた。なお、本取組が役に立つと答えた学生は80%を占めた。

### (1) 工学部1年生の特徴と課題

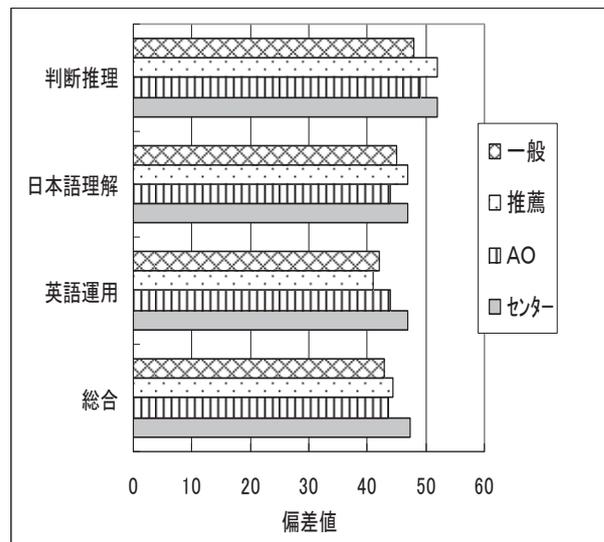


図1 基礎学力の偏差値（入試区分別）

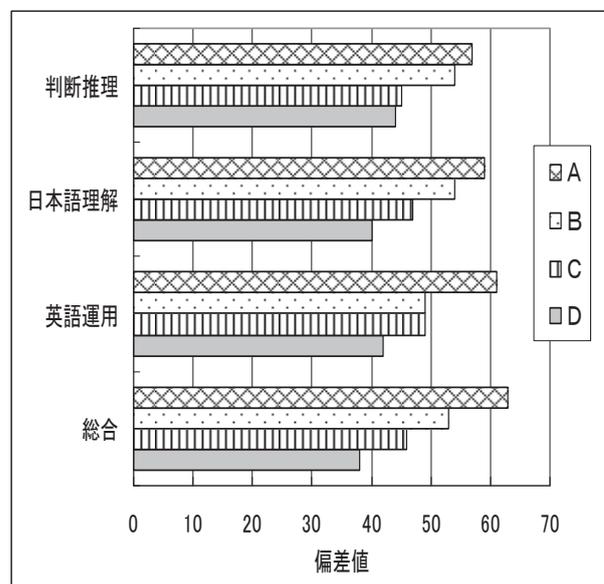


図2 基礎学力の偏差値（学カランク別）

アセスメントの調査結果より、基礎学力（判断推理・日本語理解・英語運用）の入試区分別の偏差値（図1）を総合で比較すると「センター入試＞推薦入試＞A0入試＞一般入試」の順になっており、センター入試と一般入試の偏差値の差は「4」で全体的に余り大きな開きはなかった。

学力ランク別（図2）に1年生（受験者数114名）を母集団として、基礎学力総合の順位で上位から25%をA層（29名）、以下B層（28名）、C層（28名）、下位25%をD層（29名）とした場合、A層（上位25%）とD層（下位25%）の差は「25」と基礎学力に大きな開きが出た。一律指導ではなく、下位の学生を中心に個別指導を通して、低学年で基礎学力が身につくよう基礎教育センターと連携し、学力向上に努めていきたい。

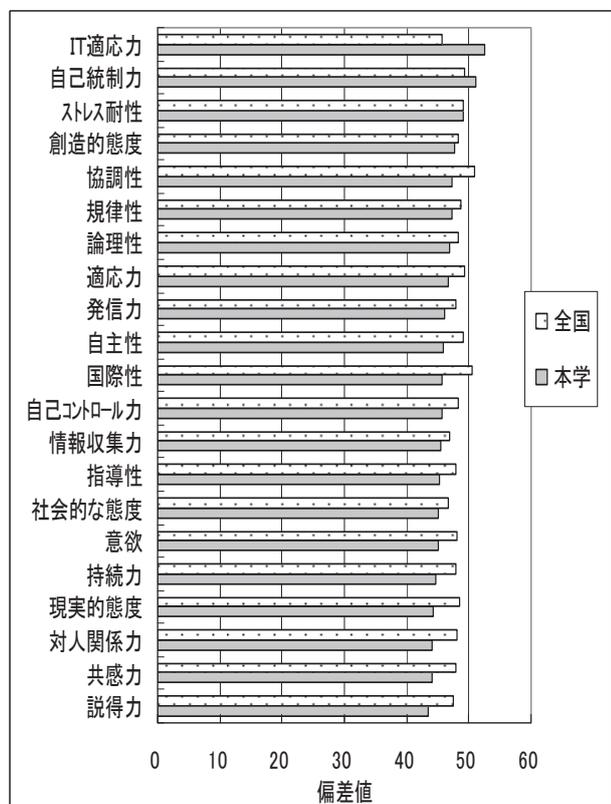


図3 社会的強み

社会的強み（図3）を全国の偏差値と比較すると「IT適応力」や「自己統制力」は全国数値よりも高い結果が出た。逆に弱みとしては「国際性」「対人関係力」や実現可能な範囲で、最も効果的な方法を実行することができる「現実的態度」等であった。これらの弱みに関しては、特に学生生活で身に付けさせ高めていきたい要素である。

(2) 工学部2年生の特徴と課題

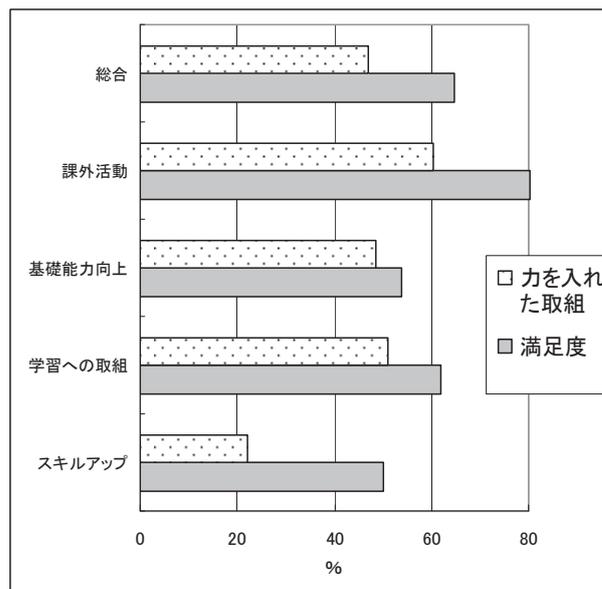


図4 学生生活での取組及び満足度

学生生活の取組の中で、力を入れた取組（図4）の詳細を分野別で高い順番に表した。

(i) 課外活動

- ①友達をつくる
- ②アルバイト
- ③対人コミュニケーションスキルを磨く
- ④クラブ・サークル活動

(ii) 学習への取組

- ①専門的な勉強
- ②コンピュータに関する勉強
- ③教員との交流
- ④語学に関する勉強

(iii) 基礎能力向上

- ①自己責任能力を身につける
- ②論理的思考力を鍛える
- ③幅広い教養を身につける
- ④文章作成能力を高める

(iv) スキルアップ

- ①資格取得のための勉強
- ②業種・企業研究をする
- ③公務員等の試験対策準備

学生生活の取組の中で、満足度（図4）の詳細を分野別で高い順番に表した。

(i) 課外活動

- ①友達をつくる
- ②クラブ・サークル活動
- ③アルバイト
- ④対人コミュニケーションスキルを磨く

(ii) 学習への取組

- ① 教員との交流
- ② コンピュータに関する勉強
- ③ 専門的な勉強
- ④ 語学に関する勉強

(iii) 基礎能力向上

- ① 文章作成能力を高める
- ② 論理的思考力を鍛える
- ③ 自己責任能力を身につける
- ④ 幅広い教養を身につける

(iv) スキルアップ

- ① 資格取得のための勉強
- ② 公務員等の試験対策準備
- ③ 業種・企業研究をする

アセスメントの調査結果より、学生生活の取組の中で「力を入れた程度」と「満足度」を見ると、どちらも「課外活動」は高く「スキルアップ」が低い。特に「スキルアップ」に関しては、力を入れた程度が22%と低いのに対し、満足度は50%となっている。力を入れてこなかった理由としては、努力が足りない、時間がないなどがあるようだが、スキルアップのため目標を決め、計画性を持って取り組む実践力が必要である。

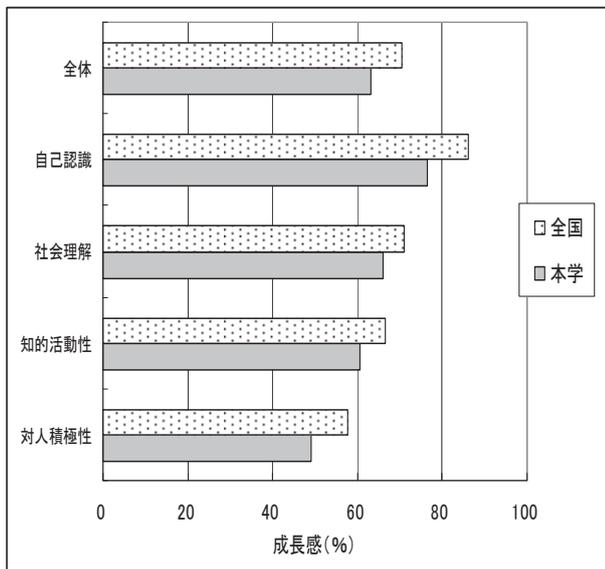


図5 成長感

自己認識：自分について深く考え、厳しくとらえたりできるようになったか。

社会理解：社会のルールや仕組みについて知ったり現実の社会の厳しさを感じ取ったか。

知的活動性：最新の知識を吸収し、自分から調べ学習するなど、知的な活動のおもしろさを体験できたか。

対人積極性：人前に出ることが苦でなくなったり、自分の意志を的確に相手に伝達できるようになったか。

入学してからの成長感（どの分野でどの程度成長を感じているか）を分野別に表した（図5）。「自己認識」の成長感が最も高いのに対し「対人積極性」の割合が低い。大学生活を1年経過したが、多くの学生は積極的に人と接したり、付き合うことが苦手であるという結果となった。図4の学生生活の取組及び満足度の中で、最も力を入れたことは「課外活動」という結果であったが、「対人積極性」の成長度には繋がっていない。学生同士はもちろんのこと教員との交流やクラブ・サークル・課外活動・アルバイト等を通して、コミュニケーションスキルを磨き、向上させていくかが今後の就職力アップへと繋げていくのには重要である。さらに、授業の中でもコミュニケーションスキルを向上させる工夫が求められる。

さらに、2年生に対して、一般常識・基礎学力テスト「START」の成績結果を基に、振り返りと自分の不得意分野を徹底的に分析することができた。本学で使用している「パーフェクト問題集」との併用で実力アップを図り、基礎教育センターや各学科との連携を図り支援の要請に努めた。

保護者には就職マガジン「Uni Career保護者編」を配付することで、子供の将来を見据え、ともに就職活動を考える機会を提供した。具体的な成果は掴めていないが、保護者の意識は高まるものと考えられ、次年度の教育懇談会（保護者会）の話題として繋げる。

## 6. 本取組の実施計画等

工学部1年生対象にアセスメント「自己発見レポート」の実施及びガイダンスによる結果報告と指導。テキストは「マイキャリアノートⅠ」を使用。

工学部2年生対象にアセスメント「自己プログレスレポート」の実施及びガイダンスによる結果報告と指導。テキストは「マイキャリアノートⅡ」を使用。

工学部1年生対象に一般常識・基礎学力テスト「START」の実施。

工学部2年生の保護者対象に就職マガジン「Uni Career保護者編」の配付（郵送）。